

ファントム・パラレル

げ つ こ う き た ん

# 月光姫譚

秋月あきら

世界は深い闇に閉ざされ、やがて闇の中にビジョンが広がる。繰り上げられる物語を綴る。

ここは夢幻世界。

君は君の世界を失った。世界から弾かれた者なんだ。だから、少女の内に彷徨いこんだ。

それは君の意思なのか？

ただ闇が広がっていた。

少年はそこに立ち尽くしていた 呆然と。

暗くて、怖ろしくて、胸が締め付けられる。闇は人の心を巢食い、古代から畏れられ、ヒトは光で闇を照らし続けた。

漆黒の中に紅蓮が灯り、空気が水面のように揺れた。

少年の鼓膜に低く重い音が届く。

次々と灯る紅。それは動物だった。それはヒトと呼ばれるモノ。でも、少し違う。

大勢のヒトは真っ白な仮面を被り、無表情なその奥で二つの炎が悪を讃えている。

人々は走り、狂い、躍り、叫び廻る。

何を叫んでいるのかはわからない。猿の奇声のようなそれは、怒っているようでもあるし、哀しんでいるようでもある。

少年は怖かった。

仮面を被った異形の者たちから発せられる鬼気が、かまいたちのように吹き荒れ、風が叫び声をあげる。

逃げた。少年は恐怖から逃げた。ただ、逃げ回った。

どこからか声がした。

「そつちじゃない、そつちは別の入り口だ！」

その声は少年に向けられていた。だが、もはや恐怖に駆られた人間に、その声は届かなかった。

少年は何かにぶつかり、闇を抜けた。

何も無い空間が硝子のように弾け飛び、碎けて少年をこの世界に向かい入れた。

そこは森の中。

木々の隙間から見える空はビロードの天幕を下ろし、天幕に空いた小さな穴から星々が顔を覗かせる。

「夢の中……？」

一〇と少しくらいの歳の少年が辺りを見回した。

森の中にほんの少し開けたその場所には、蒼白く輝く花が咲き誇り、闇を優しく照らしていた。

蒼い風が吹きぬけ、少年の黒髪で戯れる。

明らかにここは少年のいた世界とは違う雰囲気を醸し出していた。

少年にとって、この場所は先ほどの闇より怖くなかった。

花の光は温かく世界を見守り、吹く風は豊かな森に匂いを少年に届けてくれる。けれど、ここにずっと居たいとは思わない。どこか人のいるところへ。

少年は蒼白く輝く花を一輪摘み取った。その光は大地から抜き取られても輝きを失うことがなく、ランプとなつて大いに少年の心も灯してくれた。

灯りを持った少年が歩き出そうとした時、辺りに強い風が吹き荒れ、どこからか薔薇の香を運んできた。

舞い上がる花びらが世界を紅く彩る。それは薔薇の花びらだった。だが、薔薇など近くに咲いていない。

薔薇がどこからともなく現れた。この者のように。

少年が小さく驚きの声を漏らし、目の前に突如として現れた者に恐怖した。

インバネスを身に纏ったその物腰は静かで、梟のようにそこに立ち尽くしている。少年を恐怖させたのは、その顔に付いている真つ白な仮面であった。

「怖がることはない。私は先ほどの連中とは違う。顔を持たないので仮面は外せないがね」

声は優しく透き通った中性的な声で、少年には仮面が微笑んだように見えた。それが「顔を持たない」という意味なのかもしれない。

少年は少し安堵した表情になり、当然の言葉を発した。

「誰なの？」

見知らぬ人に対して発する言葉。よく有り触れた会話だが、少年の前にいる人物は有り触れた人物とは言えなかった。

「私の名前はファントム・ローズ。夢幻に囚われた者であり、夢幻に囚われた者を解放したいと思っている」

「ムゲン？」

「夢幻は夢や幻のこと。この世界も夢幻だ。私は世界に弾かれた者を本来あるべき姿に戻す、それには君も含まれている」

「意味がわからないよ。とにかくここは夢の中なんですよ？  
目を覚ませばそれでおしまいでしょ？」

白い仮面が静かに横に振られた。

「これは君の夢じゃない。だから、君は世界から弾かれた者であり、他人の夢幻に囚われた……もしくは自ら進んで迷い込んだか？」

少年にはファントム・ローズの言葉が理解できなかった。

これは夢。夢だから理解しがたいことが起きてても不思議ではない。けれど……。

「僕はここが夢だつてわかる。けど……」

「夢と現実の狭間はどこにあるのか。実に興味深い題材であるが、君は現実がどのようなものだったか忘れているのだろう。」

だから、夢と現実を比較することができない」

まさにその通りだった。少年は現実の記憶を忘れていた。現実での生活が思い出せなかったのだ。

二人は黙っていた。少年は脳内で記憶を辿る旅をして、ファントム・ローズは夜風に揺られながら佇んでいた。

少年の手の中で花が淡く輝いていた。それを見て俯いていた少年が顔を上げる。

「思い出したよ、僕の名前は明るいつて書いてメイ」

「男の子なのに可愛らしい名前だ」

「でも僕はこの名前が気に入ってるんだ。いつも僕のことを優しく呼んで……呼んでくれる……？」

誰が？

少年の耳に過去の声が微かに聞こえる。自分を呼ぶ歌うような優しい声。人影の輪郭がぼやけ、それが誰なのかわからない。とても大切なひとだった気がするのに、思い出せない。

また黙り込む少年に対して、ファントム・ローズは空気にも話しかけるように言った。

「人は自らの足で歩むべきだと思う。けれど、私はお節介な性格でね、迷える仔羊がそこにいと、声をかけてしまうのだから、私は君の前に現れてしまった」

「僕を助けてくれるってこと？」

「答えは君が見つけた方がいい。けれど、ヒントはあげよう。」

この世界は君の大切なひとの夢の中だ。だから、この夢のあちこちにそのひとの欠片がある」

「この夢の中を冒険すれば、僕は記憶を取り戻せるってこと？」

「しかし、真実は必ずしも君のためになるとは限らない。真実とは時として残酷なものなのだよ。それでも知りたくば、この夢の中を見てまわるといい」

ファントム・ローズの口ぶちは、何かを知っているような口ぶりだった。しかし、聞いても答えは教えてくれそうもない。

鼻を衝く薔薇の香が立ち込め、ファントム・ローズの輪郭がぼやける。

「私は私の使命を果たしに行く。君とはまた会うことになるだろう」

ファントム・ローズの身体の周りを大量の紅い花びらが渦巻

き、薔薇に埋もれたファントム・ローズの姿は忽然と消えた。

大量の花びらは風に煽られ、天に向かって宙を舞い、世界を薔薇の香で満たした。

メイはその場に立ち尽くして、手に持った輝く花を静かに見つめた。

蒼い風が森を吹き抜け、暗い空の中で蒼白い月が天を見下ろし嗤っていた。

メイは森の中を彷徨った。

何処行く当てもなく彷徨い続けるのは、まるで見つからない答えを捜し求めるようであり、それはまるで心の迷いを暗示しているかのようだ。

森の奥から高く澄んだ音色で、水面を鳴らす滴の音が聴こえた。

何かに呼ばれているように、微かに聴こえる音を頼りにして、メイは森の奥へと進んでいった。

やがて辿り着いたのは静かに揺れる湖。

清らかな水が囁き、水の息吹は生命を癒やし、湖の底からは叡智の源が溢れてくるような気がする。

メイは湖の上に目をやった。人影が水面の上を軽やかに飛び跳ねている。それはまさしく、バレエを舞うような動きだった。空は厚い雲に覆われてしまい、人影に月の光は届かない。けれど、華麗に舞うドレスのシルエットは見るものの想像力を掻き立て、誰もを芸術家になったような気にさせてくれる。

人影が跳ねるたびに水面が揺れ、ドレスが大輪の花のように大きく広がりを見せる。

メイは見惚れてしまった。森の中を彷徨ったのは、ここに来るためだったのかも知れないと思える。

人影が急に踊るのを止めた

目と目が合う瞬間。

メイの瞳に微かに映る女性の顔。どこかで見たことがあるように、見たことのない顔だった。

思い出せない。

二十と少しを数えたくらいの女性。その女性からはどこことな月のような、少しミステリアスな美しさを感じられた。

月の女神を思わせるその女性は水面を歩き、静かに大地に上がつて来た。そして、ドレスが黒い喪服だったことがわかり、女性の顔は美しくも儂く、心に穴が空いたような表情をしているのが見て取れた。

「お行きなさい」

凜とした声が夜闇に響き渡った。

女性に発した言葉の意味を汲み取るのにメイは時間を要し、言葉の意味を理解してもその場を動かなかった。なぜ、行かなければいけないのかわからない。

女性の足が止まる。その距離はメイの近くと言うのには遠く、メイの手が決して届かない距離であった。

「お行きなさい、わたくしに出会ったことを忘れ、行くのです」



「どうして、どうして行かなければならないんですか。僕はあなたと話してみたいのに」

「早く逃げて、でないか……！」

美しい顔が凍りつき、女性は小さく息を呑んだ。

ガサガサとメイの背後から音が聞こえた。

メイが後ろを振り向くと、木陰の奥に紅蓮が灯り、白い仮面が浮き上がってきた。それを見たメイは脅えた。あの時に見たものだ。闇の中で自分を追って来た紅色の瞳を持つ無表情な仮面だ。

ローブを纏い仮面を被った者が闇の奥から姿を現し、その傍らには可愛らしい二匹の羊が連れ添うように佇んでいた。

メイの心臓は激しく脈を打ち、足は自然と後ろに下がっていた。

白い仮面の陰から出るように、こもった声が発せられた。

「どうやってこの世界に進入したのだ？ 貴様はファントム・

ローズの手先の者か？」

「わからないよ、僕はファントム・ローズの手先なんかじゃない」

後ろに後退していくメイの背後で女性が悲痛な声をあげた。

「止めてナイト・メア、この子をどうするつもりなの!？」

「この者はこの世界の住人ではない。この者は姫に危害を加える者であります。決して生かしてはおけない存在。排除せねばなりません」

そう言ったファントム・メアの白い手がメイに向かって伸ばさ

れる。その手は実際の大きさよりも大きく見え、メイの恐怖心を駆り立てる。

掴まったら殺される。そう思ったメイは恐怖のあまり足がもつれて地面に尻餅をついてしまった。

メイの呼吸が速くなり、白い手が徐々に近づいて来る。

駄目だ掴まる！

だが、メイに救いの手が差し伸べられた。

獣の咆哮のような甲高い銃声が鳴り響き、白い手に紅い薔薇が咲いた。

すぐに幼い女の子の声が聞こえた。

「早くこつちへ逃げて来て！」

メイは声のする方向を振り向いて、とにかくその方向に向かって全力で地面を蹴り上げ走った。

紅い服に紅い頭巾を被ったメイより年下と思われる幼い女の子が銃を構えていた。小柄な身体のためか、銃がとても大きな物に感じられ不釣り合いに見える。

紅頭巾を被った女の子は片目に眼帯をしており、もう片方の瞳は憎悪や怒りを剥き出しにして、ナイト・メアに明らかな敵意を示していた。

片手から血を流したナイト・メアはすぐさま姫を取り押さえ、無事な手をメイと紅頭巾の女の子に激しく向けた。

「二人を殺せ！」

ナイト・メアの激昂する声に反応して、二匹の羊がメイに向かって走り出した。

ふあふあ雲のような毛を持つ、可愛らしい羊が襲ってくる。

銃が火を噴き、銃弾が羊に向かってもの凄いスピードで飛ぶ。だが、銃弾は羊の身体を掠め飛び、森の奥へと消えていってしまつた。

紅い頭巾の女の子が怒つたように地面を蹴飛ばす。

「あんたが邪魔で狙いがつかないじゃない！早くアタシのところまで逃げて来て！」

そんなことを言われるまでもなく、メイは全力で走っている。猛獣が喉を鳴らすような唸り声が聞こえ、メイは後ろを振り返つた。そこにいるのは二匹の羊だったが、唸り声はその羊から聞こえた。

羊の背中が裂けるのをメイは見た。羊の中に何かが見え隠れする。羊の皮を被つた何かがそこにいる。

後ろを見るのを止めたメイは唸り声から必死で逃げ、やっと紅頭巾の女の子の元へ辿り着いた。しかし、休むのはまだ早い。紅頭巾の女の子はメイに腕を取って走り出した。

羊の背中から黒い影が勢いよく飛び出てきた。その走るスピードは羊の比ではない。地面を駆ける邪悪な顔をした四つ足の獣は、巨大な黒狼であつた。

紅頭巾の女の子の足は速く、メイは引きずられるように森の奥へ走つた。後ろからは涎を垂らしながら黒狼が追いかけてくる。

舌打ちをした紅頭巾の女の子は銃口を黒狼に向けて、力いっぱい引き金を引いた。

銃声とともに一匹の黒狼が足をもつれさせながら地面の上を激しく転がり回った。

紅頭巾の女の子が無邪気に笑う。

「よし、当たった！ 残るマガミは一匹ね」

マガミと呼ばれた黒狼は仲間がやられたのを見て鳴き叫び、走るスピードを速めて森の中を駆け抜けた。

黒狼の足は速く、すぐに二人の真後ろまで迫り、紅頭巾の女の子より少し遅れて走っていたメイに向かって、黒狼が鋭い牙を向けて飛び掛かってきた。

銃声が響き渡ったが、巨大な黒狼の身体はメイの身体を地面に押し倒してしまった。

「わあああつ！」

メイは叫びながら黒狼の身体を退かそうとするが、巨大な身体は重たくて持ち上げがらず、生暖かい温もりがメイの身体に伝わってくる。

黒狼は大きな口を開け、そこに並んだ牙はどれも鋭く、子供の軟らかい肉を噛み剥がすにはちょうどよさそうで、口の奥からは生臭い香りが空気に漂ってくる。しかし、黒狼はメイに噛み付こうとしなかった。それどころか動こうともしない。

紅頭巾の女の子は銃をホルスターにしまうと、黒狼の身体を一生懸命に動かしはじめた。

「ほら、自分のことなんだからあんたも力入れて」

「えっ？」

メイは唾然とした。黒狼はすでに息絶えていたのだ。

二人で黒狼を退かし、立ち上がったメイは肩で大きく揺らし息をした。ただ疲れたのではなく、恐怖で呼吸が荒くなってしまうのだ。

呆然と立ち尽くすメイは自分の手が真っ赤に染まっていることに気が付いた。服に真っ赤な薔薇が咲いている。死んだ黒狼の血で穢れてしまった。服だけでなく、それ以上のものが穢されてしまったような気がする。

ここが夢だとしても、死という重さが心に突き刺さる。例えそれが自分を襲った獣だとしても、メイの心は酷く痛んだ。

紅頭巾の女の子は黒狼のことなど忘れてしまったように、花光る森の奥へ歩き出した。メイは慌ててその後を追う。

「待ってよ、置いていかないですよ」

「何でついてくるのよ？」

「だって、僕のこと助けてくれたのに、今度は置いてけぼりなんて酷いじゃないか」

「助けたくて助けたわけじゃないし、それにあなたのせいでチヤンスが不意になっただじゃない！」

急に強い口調になった紅い頭巾の女の子に怯え、メイはピクッと身体を震わせて足を止めた。それに合わせて紅い頭巾に女の子も足を止めて振り返った。

紅の中に浮かぶ片目の黒瞳がメイを見据える。

「あなたのせいでアタシの計画は台無しになっちゃったの。あなたさえ現れなきゃ、魔女を殺せたのに……」

俯いた紅い頭巾の女の子は打ち震えていた。

メイはどうしていいのかわからなかった。だから、この言葉が自然と出た。

「ごめん、僕が悪かったなら謝るよ」

叱られた仔猫のように身をすくめるメイを見て、紅い頭巾の女の子はため息をついて少し笑みを浮かべた。

「別に謝ってくれなくていいよ、済んだことだし。アタシの名前はベレッタ、あんたは？」

「僕の名前は明るいつて書いてメイ」

「変な名前」

「やつぱりそうなのかなあ？」

「女の子みたいな名前だし、明なのに根暗って感じがする」

根暗と言われてメイはよけいに肩をすくめた。それがベレッタの心を和ませた。

「やつぱ根暗」

「根暗じゃないよ、ただ、ちょっと人と接するの苦手なだけだよ」

「そういうのを根暗っていうの知らないの？」

「もう、根暗でいいよ」

メイは顔を真っ赤にして頬を膨らませた。ベレッタの方が幼い顔立ちなのに、今はメイの方がお子様に見える。

木を背もたれにして地面に座ったベレッタを蒼白い花が優しく照らす。

「ちょっと疲れたから休憩。メイもそこら辺に座って、ちょっと話したいことあるし」

そこら辺と顎で示された場所に、メイは膝を抱えながらちよこんと座った。

「話したいことって何？」

「人間だよね？」

突然の意標を衝く質問に、メイは戸惑いながらも上目遣いで頷いた。

「そんな変なことどうして聞くの。僕は人間だよ、たぶん。記憶喪失みたいだけど、どう見たって僕は人間でしょ？」

「この世界にいる人間はアタシと魔女だけだと思ってた」

静かな夜風が森を吹き抜け、メイは口を小さく開けた。

「そんなまさか!? ベレッタにだってお父さんやお母さんがいたでしょ？」

「みんな殺されたり連れ去られたり。だから残ってるのはアタシと魔女だけだと思ってた。魔女っていうのはメイもさっき見た女のことよ」

メイの脳裏に牙を剥く怖ろしいマガミが浮かび、あの獣に人々は殺されたに違いないと思った。そう思うと胸が痛み、悲しみがこみ上げて来る。だが、ベレッタは平然とした顔をしている。その表情を見ると、メイの心はなぜかよけいに痛んだ。

次にメイの脳裏には水面で華麗に踊る喪服の女性が映し出される。とても美しく、どこかで見た面影を持つ女性。でも、メイの中で何かが違うと言っている。それが何なのかわからない。

ベレッタはホルスターから銃を抜くと、スライド部分を愛で

るように弄り回し、銃の先端に口付けをした。

「この銃は悪魔から貰ったの……片目と交換でね」

風が囁くように静かに言ったベレッタは、眼帯を少しずらして見せた。現れた瞳は燃え上がる炎のように紅く、だがしかし、感情が全く感じられない冷たい印象を受けた。偽りの炎が瞳の中で燃えている。

すぐにベレッタは紅い瞳を隠し、銃をホルスターにしまった。その時、メイはホルスターのグリップに薔薇の模様が描かれているのを見逃さなかった。

薔薇と連想して、メイはすぐに白い仮面を思い浮かべた。一つではなく、二つの仮面を思い出した。ファントム・ローズとナイト・メア。二人は仮面を付けていたのは同じだけど、それ以外にも似ていたような気がした。

メイはベレッタにファントム・ローズの話を持ち出すとしたが、ベレッタが突然立ち上がったのでタイミングが計れずに言い逃してしまった。

木々の合間から見える空を上げたベレッタは、誰に言うでもなく呟いた。

「いつになったら朝が来るんだろうね」

木々がざわめき、鈴の形をした花が玲瓏たる音色を奏でる。

少女の横顔は紅頭巾によつて隠された。少女は今、どのような表情をしているのだろうか？

しばらく時間が流れ、再びベレッタが口を開いた。



「これから危ないところに行くから、メイとはここでお別れ。せつかく会えた人間だったのに、少し残念ね。お互い生きてたらまた会いましょう、バイバイ」

素っ気無く言ったベレッタは背中越しに手を振って歩き出してしまった。

また置いていかれた。そう思ったメイは急いで地面を駆け、ベレッタの前に立ちほだかった。

「どこに行くの？ 僕も行くよ」

「お子様は危ないから暖炉のあるおうちで、温かいスープでも飲んでたら？」

「お子様って僕のことを言ってるなら、ベレッタは僕より子供じゃないか!？」

「アタシは絶対に魔女を殺すの」

魔女という言葉に反応してメイの脳裏にあの女性の姿が浮かぶ。喪服を着て、愁いの帯びた顔をしていた。どことなく透き通ったイメージを持っていたあの女性は魔女と呼ぶには相応しくないように思えた。

「あの人そんな悪い人に見えなかったよ」

「そうかもしれないけど、今はナイト・メアにたぶらかされてる」

「ナイト・メアって僕らを殺すように命じた仮面の奴だよ、あの人がそう呼んでたような気がする。あ、待って、あのナイト・メアも人間じゃないの？ 人間は二人だけだって言ったよね？」

「あれは悪魔だから人間じゃない。この世界に突然現れて、お姫様をたぶらかせて、この世界を永遠の夜で包んだ張本人」

「永遠の夜ってなんのこと？」

そう言えばベレッタが夜空を見上げながら呟いていた。

いつになったら朝が来るんだろうね。

「そんなことも知らないの。記憶喪失って嫌ね」

ベレッタは鼻で笑った。

本当は記憶喪失だから知らないのではなかった。メイはこの世界の住人ではない。ベレッタはメイがこの世界の生き残りだと勘違いしているのだ。

手の焼ける子供を見るような眼差しで、ベレッタはメイの瞳を見つめた。メイはこの感覚に、どこかで感じたことのあるような懐かしさを覚えた。

少し間を置いてベレッタが顔についた薔薇の蕾を小さく動かした。そこから発せられた言葉は子供に物事を説明するような優しい声。

「この世界は一日中間に覆われ、決して朝が訪れることがなくなってしまうたの。アタシは光を取り戻したい。それだけ、アタシの想いはそれだけなの……」

ベレッタの紅い衣装は憎悪や怒りなどを示しているように思えた。けれど今は違って見える。紅い衣装は外側だけにしかないのだ。内にいるベレッタの心は紅に隠されている。

真剣な顔つきをしたメイの腕は上にはあげられていないが、その拳は下を向きながらぎゅっと硬く握られていた。

「僕も行くよ、魔女っていうひとやつつけに行くんじゃないやなくて、話がしたいんだ。ほら、話し合いで解決するかもしれないじゃないか？」

「好きにすればいいわ、話し合いなんて無駄だと思うけど」

「やつて見ないとわからないじゃないか？」

「やつても駄目だったのよ。ナイト・メアに良心の心はないし、魔女だって今は悪者に成り下がったわ。齒向かう者はみんな殺されちゃうのよ」

メイにはなんとも言えなかった。確かにナイト・メアは自分たちを殺そうとした奴だ。けれど、メイは覚えている。あの女性にはナイト・メアを止めようとして、メイを助けようとした。少し悲しいような、怒っているような、なんとも言えない表情をしてベレッタはそっぽを向くと、そのままメイを置いて歩き出してしまった。

静かな森に静かな足音が二つ響く。

メイはベレッタの後ろを一步下がってついていった。ベレッタは何も言わない。だから、メイも何も言わなかった。でも、それがメイはもどかしかった。

世界が闇に閉ざされようと、森の中では花が光を放ち、微かに小動物たちの気配もする。闇の中にも世界があつて、色彩があつて、生命の躍動がある。けれど、昼に比べれば虚しい感じがする。闇の中に響く音はどこか虚しいのだ。

森の中をしばらく歩き、二人はあの湖まで再び戻ってきた。ここに人の気配はない。マガミの気配もない。静かな静かな

夜の湖がそこにはあった。

月は丸く、蒼白い光によつて水面が煌き囁き、妖精たちが噂話をしているようだ。

湖の向こう側は不気味な白い霧に覆われ、その奥に微かな影が見える。天を衝く巨大な影 それは塔だった。

ベレッタは塔の下から上に向かつて指差し、肩越しに顔を後ろに向けてメイを見た。

「あの塔に姫が住んでるの。満月の晩だけ外に出てくるから、そこで襲おうとしたんだけど失敗。もう二度と同じ手は使えないわね」

「ごめん、僕のせいだよね」

自分を責める表情をしたメイに対してベレッタは少し笑つて見せた。ベレッタは言葉を発さずただ笑つただけだったが、そのおかげでメイの心はだいぶ救われた。

塔は湖の中心から天に伸び、泳いでいくかボートなどの乗り物を使うしかなさそうだが、乗り物は近くに見当たらない。

あの女性は水の精を思わせる軽い足取りで水面の上を歩いていた。もしかしたら、この世界では水の上を歩けるのかもしれない。けれど、違うらしい。

「どうやってあの塔まで行こうかしら？」

「ボートは？」

「ないわよ、そんなの。あいつらは不思議な魔法でなんでもできちゃうんだから、ボートなんて用意してない」

「じゃあ、僕らはどうやって行くの？」

「それを考えてるんじゃない」

少し顔を赤くしたベレッタは腕組みをして黙り込んでしまった。

「ベレッタは泳げるの？」

「泳げないわよ、悪かったわね」

「よかった、僕も泳げないんだ」

安心した笑みを浮かべるメイにベレッタは心の底から呆れ返った。

木の葉がカサカサと揺れ、闇の奥に金色の光が浮かび上がった。それもひとつではなく、二つ四つ六つと輝いている。

「逃げるのよメイ！」

叫び声をあげたベレッタにメイは反応しきれず、後ろを振り向いただけで精一杯だった。木陰から飛び出してきた三匹の羊がメイの瞳に映し出される。

「わあああつ！」

羊の背中が裂け、中からマガミが飛び出し牙を向ける。

銃が火を吹きマガミがメイの目の前で黒土に落下する。しかし、マガミの脅威はベレッタを襲っていた。

二匹のマガミがいつせいにベレッタに襲い掛かる。メイを助けてしまったうえに、一匹目を殺しても、生き残った一匹にベレッタの身体は八つ裂きにされるだろう。

誰もがもう駄目だと思おう状況で、メイは強く目を瞑った。ベレッタが獣に喰われるところなど、見たくもない。

突風が巻き起こり、目を瞑っているメイの鼻を強い薔薇の香

りが衝いた。

悲痛な獣の叫び。何かが進る音。薔薇の匂いは咽るほどに強まった。

メイは目を開けるのが怖かった。しかし、開けずにはいられない。見てないところで何かが起こったの明らかだった。

恐る恐るゆっくりと目を開けたメイの瞳に映し出されたのは、紛れもなく薔薇の使者　ファントム・ローズ。

「真に危険が迫った時、真に私が必要な時、私は現れてしまう。助けたのは余計なお世話だったかい？」

風に揺れるインバネスに身を包み、手には鞭と化した太い薔薇の茎を握っていた。その傍らには狼の形をした薔薇の花びらの山が二つある。その薔薇の山は風に吹かれると、渦巻きながら天に昇って舞い上がった。そして、あとには何も残らない、何も。

銃を地面に下ろし立ち尽くしているベレッタの口から言葉が零れ落ちる。

「……悪魔」

「私のことも悪魔と呼ぶか……。確かに血の契約とともに君の光を半分いただいたが、その代わりに力を与えた。銃を望み創り出したのは君だ。銃は憎悪、怒り、敵意を示し、それとともに君は命の儂さを知っている」

ベレッタに仮面を向けるファントム・ローズ。おそらく力とは銃のことを言っているのだらうとメイは察しが付いた。だが、この二人の関係はいつたい？

「アタシひとりでこの世界に光を取り戻すって言ったでしょ!?  
あんたは邪魔しないでよ!」

「私は君に力を与え、見守った。しかし、朝はまだ来ない。人は己の力で道を切り開いて欲しいと願っている。けれど、私はお節介なものだから、口を出したくてしかたなくなる。その衝動は私にも押さえられないのだよ」

フロントム・ローズは一呼吸置いて、メイを指差して再び口を開く。

「それと、君が現れたことにより、この世界は変わるかもしれない」

「僕……?」

指を差されたメイはきよとした表情をした。今まで目の前で成されていた会話でさえ、置いていかれている感じがしていたのに、突然指を差されてよけいに戸惑いを覚えた。

白い仮面が霧の奥に霞む塔を見つめた。

「私は知っていた　ベレッタだけでは光を取り戻せないことを。メイは鍵となつて光の扉を開けられることだろう……しかし、それが幸せなことなのか私にはわからない。時は満ちた、約束の地には私が案内しよう」

足音も立てない静かな足取りでフロントム・ローズが歩き出した。その足は一步一步、湖へと近づいていく。そして、メイとベレッタは目を見開いた。フロントム・ローズが乗ったのだ。フロントム・ローズの足は水面に乗った。フロントム・ローズはそのまま少し水面を滑るように歩き後ろを振り向いた。

「私の通った道を歩くといい、そうすれば沈むことはない」

陸から湖の上まで色艶やか紅い絨毯が敷かれていた。その絨毯はファンと・ローズの足元まで続いている。紅い絨毯の正体は薔薇の花びら。薔薇の花びらが水の上に艶やかに浮き、月光を浴びながら揺られていた。

ベレッタはすぐにファントム・ローズのあとを駆け足で追って薔薇の絨毯の上に乗った。

メイは少しおどおどしながらも、ゆっくりとつま先から薔薇の絨毯に乗った。その感触は木の葉の上を歩くのときほど変わらず、一歩進むごとに下から薔薇の香りが上に抜ける。

霧の中に浮かぶ巨大な影が揺ら揺らとゆらめき、その輪郭が徐々にはっきりとしてくる。

沈んだ灰色の塔はどこか陰気で寂しく、霧に包まれていることよって見ているだけで憂鬱な気分になってくる。

メイたちの前に巨大な鉄門が立ち塞がった。ここが塔の入り口らしく、門はともて頑丈そうで鍵がなければ中に入れそうもなかった。

ベレッタが門を開けようとして、引いたり押したり、最後には突進してみたが、びくともしない。

門を蹴飛ばして怒りをあらわにするベレッタの身体をファントム・ローズは優しく腕で退かした。

「君には開けられない。この門は固く閉ざされた心を暗示している。この門を開けられるものは限られているが、君はその正反対の人であり、君が無理やり開けようとするほど、門



「は固く閉ざされることだろう」

「アタシに開けられないってなんでよ、あんだたったら開けられるの？」

「否だ。私にも開けられない　互いの想いが足りないからな。この夢幻世界で開けられる可能性があるのはただひとり、君だけだ」

振り向かれた仮面が微笑んでいるようにメイには見えた。

メイは静かに鉄門に近づいた。それだけなのに門が開いていく。メイが一歩進むごとに、門が少しずつ軋みながら開いていく。扉はまるで心を開いたように開き、塔はメイを自ら受け入れたのだ。

開かれた門を見てメイははしゃぎ、急いで中に入ろうとした。

「開いたよ、早く中に入ろうよ！」

さつさと中に入って行ったメイの背中を見て、ベレッタは言葉を漏らした。

「なんでメイには開けられるの？」

「君はその理由を知っているはずだ。思い出せないだけだ」

「思い出せないって　!？」

すぐ横で声がしたと思つたのに、ファントム・ローズの影はすでに門の奥に潜む闇へと吸い込まれようとしていた。

ベレッタは地面を蹴飛ばした。

ファントム・ローズはいろいろなことを知っている。それなのに中途半端にしか語らない。それではお節介ではなく性質が悪いだだけだ。メイはそれに腹を立てたが、ファントム・ローズ

に詳しく聞こうとしない自分がいて、ファントム・ローズを頼らないようにしようとしている自分いることにも気が付いていた。

自分への怒りを認めようとしなため、怒りは全て憤りのない怒りへと変わる。

ベレッタは幼い子供のように顔を膨らませて門の奥へ飛び込んだ。

塔の中はこれと言って何もなく、外観はあんなにも頑丈そうて天を衝く勢いで伸びていたのに、中身は空っぽだった。

塔の内壁には螺旋階段が天井に向かって走り、試行錯誤しながらも確実に進んで行くようだった。その螺旋階段の途中の壁には扉があるが、扉の先は外のはずで、塔の外観には扉はなかった。つまり、扉は別の場所に通じている。扉の奥には何があるのだろうか？

何もなかった石造りのフロアの中心に人の全身を映せるほどの鏡が現れた。

美しく磨かれた鏡の前にメイは立ったが、そこに映し出されたのは一匹の黒猫であった。

メイの頭に稲妻が走り、メイはよろけながら地面に手をついた。

「やつぱり、僕はあの女性に会わなきゃいけないんだ。僕はそのためにここに来た。あの女性はきつと……」

黒猫の姿が消え、新たに何人もの人影が映し出される。それ

を見たファントム・ローズは疾風のごとく地面を駆け、メイの身体を抱き上げて宙に舞った。

激しく地面が砕け飛び、メイのいた場所にはリング状の金属がめり込んでいる。そのリングには棒が取り付けられており、その棒はしっかりと何者かに握られていた。

地面に軽やかに着地したファントム・ローズはメイを地面に優しく下ろし、低く響く声で呟く。

「ミラーズか」

水面を打つ波紋に鏡の表面が揺れ、その中から何人ものミラーズが飛び出してきた。

今先ほどメイを撲殺しようとしたのもミラーズだ。

真上から見ると、つばがひし形をした大きな帽子を被り、白とクールブラウンを基調とした質素なドレス姿を着て、首には鎖が巻き付けられている。手には銀色をした棒の先端に大きなリングが付いている杖のような物を持っている。そして、何よりも目を引いたのは、目の部分に包帯のようにグルグルと巻かれた布だった。

この場を集結したミラーズの数は一四人。目には顔に巻きつけられた布の下についた口は微笑んでいた。

ミラーズたちの狙いはファントム・ローズだった。

怖ろしいほどに白い仮面が笑って見えた。

銀色の杖を構えたミラーズがいつせいにファントム・ローズに襲い掛かる。

ファントム・ローズの右手が揺らめき一瞬消失したかと思う

と、その手には一輪の薔薇が握られていた。

薔薇の匂いを嗅いだファントム・ローズはそれを天に掲げた。すると、ファントム・ローズの周りを無数の薔薇の花びらが竜巻のように舞い上がり、美しくも荘嚴な薔薇の花びらはミラーズに向かつて降り注ぐ。それはまるで血の雨のようで、紅い花びらは刃となり牙となり、ミラーズの身体を容赦なく切り裂く。薔薇の匂いが強くなる。

激しく舞い散る紅に彩られたミラーズは地面に倒れ、そこにファントム・ローズは空かさず四本の白薔薇をダーツのように投げつけた。

薔薇の花を突き刺されたミラーズは口元を酷く苦痛に歪ませ、人の声とは思えぬほどの呻き声を張り上げた。すると、白かった薔薇の花が見る見るうちに紅く染まり、それと同時にミラーズの身体が枯れ木のように萎んでいき、衣服だけがその場に残され、その衣服さえも最期には砂になって舞い散った。

ファントム・ローズはミラーズの居た場所に残された一輪の真っ赤に染まつた薔薇の花を拾い上げ匂いを嗅ぎ言った。

「哀しい匂いがするな」

風を切り、伸ばされたファントム・ローズの手から鞭が放たれ、フロアを中心にあつた鏡を叩き割った。

鏡は悲痛な叫び声をあげ、舞い散る砂のように煌く破片は風に乗って滅びた。

白い仮面がベレッタに向けられる。そこには銃を構えて立ち尽くすベレッタの姿があつた。

「獣は殺せても、人型をしたものは怖くて殺せないか？」

「違うわよ、あんたに当たるといけないから撃たなかっただけよ」

「そうか……」

呟いたファントム・ローズの表情は仮面に隠されて見ることができない。

メイが叫び声をあげる。

「また鏡が!？」

一つ二つ……と鏡が現れる。その鏡にはミラーズたちが映し出されていた。

ファントム・ローズが螺旋階段を指差して叫ぶ。

「君たちは先を急ぐがいい、ここは私が引き受けた」

先に動いたのはメイだった。そのあとをベレッタは慌てながらついて行った。

螺旋階段を駆け上がるメイは途中にあった扉に目もくれず、ただ一心不乱に導かれるままに天を目指した。その後ろにはベレッタ、その遙か下からはファントム・ローズが取り逃がしたと思われるミラーズが螺旋階段を駆け回ってくる。

「メイ、扉に入って奴らから逃げましょうよ」

「扉の中にはあのひとの思い出が詰まっている。けど、僕がいかなきゃいけないのはそこじゃないんだ」

怒鳴ったわけでも、大きな声を出したわけでもなかった。搾り出すような小さな声には重く想い感情が込められていた。それを聴いたベレッタは押し黙りメイのあとを追うことしかでき

なかつた。

天井の一部から漏れた月光が塔の内部に差し込む。出口はもう少しだ。

月光の扉を潜ったそこは塔の屋上であつた。

霧を抜けた塔の屋上からは雄大な宇宙を展望することができ、星々が静かにひそひそと輝いている。

蒼い風の吹き抜けるそこで、メイとベレッタは姫とナイト・メアと対峙した。

壮大な宇宙は流れる星を地面に幾つも降らせ、風は壮絶なる詩を世界に運び、今ここが世界の中心となつた。

喪服を着た姫は哀しい表情をして顔を両手で覆つた。

「どうしてここにきてしまったの……、この城は誰にも侵入されたくない場所だつたのに、誰も入れないはずだつたのに、それなのにきてしまったのね……」

泣き崩れた姫は地面に手をつけて、肩を大きく振るわせた。

ナイト・メアは姫を守るようにして、メイとベレッタの前に立ちはだかつた。

「なぜ、姫を悲しませるのだ。姫を悲しませる者などこの世界に必要なはない」

ホルスターから銃を抜いたベレッタがメイを押し退けてナイト・メアに怒りをぶつける。

「アタシの望みはこの手でおまえたちを殺すことよ」

銃を持つベレッタの手は微かに震えていた。

ナイト・メアがベレッタに一步近づく。しかし、銃の引き金

は引かれない。

また一步、ナイト・メアがベレッタに近づく。しかし、銃の引き金は引かれることなかった。

白い仮面の奥から嘲りが聞こえる。

「撃たないのか？ その銃で私を殺すのではないのか？」

「撃つわよ、それ以上近づいたら撃つわよ！」

金切り声をあげるベレッタにナイト・メアが近づいた。しかし、銃は引き金を引かれることなく、銃口は地面に頂垂れた。

ナイト・メアの手が鋭い爪に変わり、叫びながらベレッタを襲う。

「それが貴様の紅かつ！」

動かずにいる紅い衣装を纏った少女に爪が振り下ろされる。

無我夢中で動いたメイはベレッタの身体を突き飛ばした。だが、爪はベレッタではなく、メイを襲うことになってしまった。

「うああっ！」

悲鳴をあげたメイの腕から鮮血が噴出し、床を色鮮やかに彩る。

血汐をベレッタの顔をも紅く染めた。

「メイーっ！」

床に倒れるメイをベレッタが抱きかかえ、力強く銃を握り直した。

天を稲光が翔け、雷鳴が世界に轟いた。

煙をあげる銃口。

ナイト・メアはちぎれた薔薇を胸に抱いてよろめいた。

「よくも、よくもやってくれたな！」

白い仮面は確かに狂気に歪み、荒々しい息を立てながら、鋭い爪をベレッタに向けようとした。

再び銃口が連続して火を噴く。

咲き誇る紅い薔薇。

だが、ナイト・メアは動じずに爪を振り下ろそうとした。しかし、爪は振り下ろされることなく、白い仮面は宙を舞い飛ばされ、身体は地面に崩れ、萎んでいった。

「これが私の使命だ」

そこに立っていたのはファントム・ローズだった。

ナイト・メアの身体は消えてしまい、その場には紅い薔薇の花と白い仮面だけが残されていた。

地面に残った白い仮面が宙に浮き、それに合わせるように身体が空間から滲み出すように現れた。それはナイト・メアのようであるが、少し違う。

「久しぶりだね、ファントム・ローズ。今回はボクの負けだ。だからこの娘の夢から出て行くでしょう。けれど、まだこの娘が目覚めるとは限らないよ」

その声は明らかにナイト・メアとは違い、玲瓏たる少年の透き通った声だった。

少年の声を持った仮面の使者の身体が空間に解けていく。それを見たファントム・ローズが手を伸ばして声をあげる。

「待て、ファントム・メア！」

「さよなら、ボクの愛しいローズ」



高らかな少年の笑いが空間に消えていった。

戦いの終えた静かな屋上では鳴き声が木霊していた。一つはうずくまる姫のもの。もう一つはメイの身体を支えながら抱くベレッタのものだった。

「メイ、しっかりとよメイ」

「だいじょうぶ、血が出ただけだから」

幼い少女の泣き顔をしたベレッタの声が震える。

「だって、こんなに血が流れて、メイの顔が蒼くなってる……」

「だいじょうぶだから、それよりも僕はあの人に話をしなきゃ」

ゆっくりと立ち上がったメイは静かに泣いている姫のもとに向かった。

姫は床にうずくまり肩を震わせ、小さな声で何かを言っていた。

「わたくしを守ってくれる人は誰もいない。もう駄目だわ、もう駄目なの……」

「顔を上げて」

優しい言葉とともにメイは姫に手を差し伸べた。

ゆっくりと顔を上げた姫。

「わたくしは誰も信じられない。わたくしが信じていたのはナイト・メアだけだった。あの人だけはわたくしを守ってくれた」

「僕も守るよ、あなたのことを。だから、夢から目覚めて欲しい」

いんだ、そのために僕はやってきた。僕にはわかる、この世界は夢なんだ」

「この世界が夢？ そんなはずありません、わたくしにはこれが現実だったわかります。だからもう……」

姫が突然立ち上がり、屋上の端に向かって走り出した。

呆然と立ち尽くしてしまつたメイの横を紅い影が擦り抜ける。塔の上から羽ばたこうとした姫の腕をベレッタが掴んだ。しかし、反動と重さに少女の腕は耐え切れず、二人は塔から落ちてしまつた。

煌びやかに水しぶきを上げた湖は二人を呑み込み、二人は深い深い水の底へと墮ちていった。

湖は深紅に染まり、風が泣き叫びながら森を駆け抜け、森は木の葉を揺らしながらざわめいた。

あまりのできごとにメイは言葉も出せず、床に膝をついて顔を両手で覆つた。

「僕は……僕は……」

「君はここであきらめるのか？」

メイが顔を上げると、そこにはファントム・ローズが立っていた。

「でも……」

「君があきらめないと言うのであれば、これを託そう」

ファントム・ローズはどこからか宝石箱を取り出し、メイの顔の前に差し出した。

「これは？」

「数ある部屋の中から見つけて来た。そのせいでここに駆けつけるのが遅れてしまった。きっと、この中には大切なものが入っているのだろう」

「でも、今更開けたって、どうにもならないんじゃない？」

「この世界はまだ消滅していない。あの娘の想いは深い場所に沈んでしまったただけだ。それを呼び覚ますことができれば、おそらくは……」

宝石箱を受け取ったメイが蓋に手をかけた時、ファントム・ローズが静かに言った。

「少女が目覚ませば、君はこの世界から消えるかもしれない。それでもいいのかい？」

「僕は本来、もういないんだ。それなのにワガママを言ってここに来た。あのひとが目覚めてくれればそれでいいよ」

宝石箱の蓋が開けられる。

解き放たれた想いは世界を巡り巡りて世界を呼び覚ます。

メイは何かに誘われるままに塔の淵へと足を運んだ。

夜空には雲ひとつなく、星が歌い、月は燦然と輝き世界を照らし、紅い湖の色が透き通る蒼へと変わっていく。世界は変わろうとしていた。

宝石箱の中から美しいメロディーが世界に広がり、その音の波紋は水面を揺らした。

湖の底から泡が溢れ出てきて、それは七色に輝くシャボン玉のように、いくつもいくつも天に昇っていく。

シャボン玉が静かに弾けると、その中からオーロラ色に輝く

蝶が生まれ、美しい蝶たちは可憐に宙を舞い、シャボン玉から孵った蝶は世界の成長を暗示していた。

湖の表面が金色に輝き、荘厳たる輝きとともに崇高さを兼ね備えた白い繭が水底から浮上してきた。

蘇る想い、目覚める想い、大切な想い。

繭に小さな輝が幾つも入り、それはやがて大きな輝となり、白い繭から眩い光が漏れ出す。

清らかなる魂を守っていた繭が硝子のように砕け飛び、中から美しい一糸も纏わぬ少女が生まれ出た。

少女の顔は姫にもベレッタにも似ていた。けれど、その顔は二人のどちらでもなく、どちらでもあった。その顔は姫とベレッタの歳の真ん中を取ったほどの少女であったのだ。

繭から生まれ出た少女の成長した姿が姫であり、少女の幼い姿がベレッタであった。そして、この夢を見る少女の姿でもあった。

世界に一筋の光が差し込み、天から天使たちが星の船を運んで舞い降りてくる。

少女を乗せた船は光の道を通って、空に開いた光の扉に吸い込まれていく。それに合わせて鐘の音が世界に響き、空に掛かっていた黒い幕が開ける。目覚めの朝が来ようとしていた。

少女は夢幻を抜け、空には青空が広がり、鳥たちが天を舞いながら世界を称える詩を謳いはじめた。

澄み渡った青空を塔の屋上から見つめるメイの表情は安堵感に包まれていた。その傍らにはすでにファントム・ローズの姿

はない。ファントム・ローズはこの世界の住人ではないのだ。  
そして、メイも……。

活気に満ち溢れはじめた世界は輝きを増しはじめ、やがて世界はミルク色に覆われた。もう、メイの姿も呑み込まれてしまった。少女が完全に目覚めたのだ。

その日、眠り姫とあだ名されていた美しい少女が病院のベッドで目覚めた。

目覚めた少女の両親は大喜びであったが、少女の気持ちは沈んでいた。

メイは？

少女のその言葉に両親は重たい表情をして、少女が眠りにつく前に可愛がっていた猫が死んだことを告げた。

静かに少女は息をついて、自分の胸に手を当てた。メイはこ  
の中で生きている。そう考えると、気持ちが無暗になつた。

病室から見える窓の外では木枯らしが舞い、紅い花びらが天  
に昇っていった。